

## 中山間地域の保育学生の地域ボランティア活動への取り組みと展望 —地域インターンシップへの発展を視野に—

八尋 茂樹<sup>1)</sup>\*

1) 新見公立短期大学幼児教育学科  
(2017年11月15日受理)

本稿は、2017年度前期(4月1日~9月30日)に、新見公立短期大学幼児教育学科の学生が取り組んだ市内ボランティア活動のうち、筆者が窓口となった地域貢献活動についての取り組みの成果の報告と、今後の学生ボランティア活動の発展性についてまとめたものである。中山間地域にある本学の保育学生が、より活動の機会を増やし、より充実した経験にするために、大学と地域のこれまでの協力のあり方を見直し、課題を克服することによって、互いに満足いく成果に近づく可能性について報告した。また、現在の地域の中でのボランティア活動を「奉仕の見返りを求めない」活動と位置付けるのではなく、「学び」や「成長」を見返りとして地域と学生が対等の立ち位置に着くサービス・ラーニングへ発展させ、さらには、単発の活動で終わらずに連続的な活動とし、大学教育の中で地域に貢献しながら、同時により教育効果を高めるために、中山間地域の学生による地方創生を視野に入れた地域インターンシップを導入させる提案をした。

(キーワード) 中山間地域、保育学生、ボランティア活動、地域インターンシップ、実地体験活動

### 1. 本学保育学生のボランティア活動の環境における課題

本学の保育学生は、自身が学んでいる専門分野である保育・幼児教育に関するボランティア活動<sup>註1)</sup>には積極的に取り組むことができている。例えば、本学学内に設置されているいみ子育てカレッジ「にこたん」でのボランティア活動は、子育て中の親子の交流、活動モデルに直に触れることができるため、保育者となることを目指している学生にとって参加する理由が明確であり、実際に非常に貴重な機会となっている。その他、近隣小学校での読み聞かせボランティアなどにも、幼保小の連携が重視されるようになってきた昨今の傾向を踏まえ、ほとんどの保育学生が積極的に参加している。

それらと比較すると、保育・教育系以外の一般的なボランティア活動への参加は盛んであるとは言いがたい。その理由は、例えば、第12回地方創生にいみカレッジ・鳴滝塾(2016年12月8日)での学生ボランティアの活動報告後の意見交換において学生から提示されたように、「交通の利便性が非常に悪く、活動場所が市内であっても遠方の場合には行きたくてもいけない」、「どこでどのようなボランティアの募集があるのかが伝わってこない」、「短期大学はカリキュラムやスケジュールが過密で、参加したくてもできない」という事情を学生が抱えているためである。また、先述の鳴滝塾において筆者は、学生へのボランティア募集の呼びかけの際に、「アルバイトが忙しいのでボランテ

ィア活動に参加できない」、「就職に役立つボランティアに優先的に参加したい」などの理由で不参加が伝えられることもあるとコメントした。この意見交換の場では、市民からも「学生にボランティアの呼びかけをしたいと思っているが、学生さんや大学にも事情があるようなので、積極的に呼びかけをしてよいものかどうか分からない」という意見も出た。これらの課題の克服を目指し、「学生がボランティア活動に参加しやすい環境を地域と大学と一緒に作り上げながら、ボランティアに積極的に取り組んでいくように大学からも学生に働きかけていきたい」という方向性が示され、今年度の活動に反映させるように心がけた。

### 2. 活動内容

2017年度前期において、筆者が窓口となって調整、引率した幼児教育学科在籍学生対象のボランティア活動の内容は以下のとおりである。

4月29日(祝) 親子たこあげ大会

(新見ロータリークラブ) 17名

6月4日(土) 哲多ふる里すずらんまつり 7名

6月24日(土) キャンドルナイトin新見

(新見市市民環境会議) 25名

8月2日(水) 神郷の園納涼祭(障害者支援施設) 12名

9月10日(土) 萬歳ふれあい大運動会

(萬歳小・保育所・ふるさと振興協議会) 12名

\*連絡先: 八尋茂樹 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2



写真1 神郷の園納涼祭ボランティア活動

### 3. 所見

#### 3-1 学生の地域ボランティア活動の環境整備と活動の成果について

2017年度前期の活動では、前節で挙げた課題を克服するために、事前に行事主催者と協議し、以下の成果を得ることができた。

- ・小さな活動や行事であっても、主催者には活動名やイベント名をつけていただくことにした。これによって学生が実習や就職活動に関する履歴書のボランティア活動の欄に正式な活動名を記録できるようになり、ボランティア活動への参加意欲が増した。
- ・終日であったり、長時間の活動となったりする場合は、主催者の厚意で食事を出していただいた。
- ・活動場所が遠方の場合、送迎に関しては主催者側が担当して下さったり、新見みらいづくり会議が「学生の祭事移動支援事業」の一環として取り組んでくださったりした<sup>注2)</sup>。

これらの背景をより詳細に説明すると、以下の通りとなる。

公立の短期大学の学生の中には、経済的な事情から学費が高くない公立短大への入学を希望した者も少なくない。

そのため、ボランティア活動に参加したくても、交通費や食事代を気にして辞退している者もいる。そのような背景から、2017年度前期は主催側や地域住民の協力によって食事や送迎の支援をしていただけたことで、学生側に「参加できない要因」が減っていき、より多くの学生が参加できるようになった。また、正式な名称のあるボランティア活動に取り組んだことで、就職活動などの履歴書に明確に記載することができるようになった上に、活動に参加したことへの充実感を目に見える形で実感し、複数の活動に参加する学生が多くなった。これらの活動への参加した学生からは「次のボランティアはいつ頃告知されますか」とか「先日の行事と同じようなボランティアはありませんか」という問い合わせが来るようになった。「『暑いでしょ』と言って冷えたジュースを差し入れてくださるなど、地域の方々が私たちのことを気遣って大切にしてくださったのがうれしかったし、その姿勢がとても勉強になった」、「地域の方々と触れ合って、仲間に入れていただいたことで、この町に来て良かったと初めて思えた」という感謝の気持ち、シチズンシップの自覚を表明する学生が増えたのも2017年度前期の傾向である。

また、保育学生としての意見としては、親子たこあげ大会では、「親子の触れ合い方を目の前で観察できて勉強になった」、「日頃は幼児期の子どもを対象として勉強に取り組んでいるが、小学生以上の子どもたちと触れ合うことができ、対応の仕方の勉強になった」と、親子の関係性や、幼児（園児）から児童（小学生）への連続的な成長について学びを深める体験のひとつになったことを挙げた学生がいた。「地域の人たちと一緒に取り組んだことで、保育者も園の中だけで活動しているのではなく、地域の中で活動していくことを意識することも大切だと感じた」という保育者としての立ち位置、姿勢について学んだ者もいた。障害者支援施設の納涼祭ボランティア後は、「障害を持っておられる利用者の方々だけでなく、実習でもお会いできない利用者さんの家族や、施設の後援会の方々と交流ができたことが貴重な時間だった」と、講義・演習や保育実習（施設実習）でも学ぶことができない大切な経験となった学生もいた。また、地域の方々からも「今回学生さんがまじめに本気で取り組んでくれて、地域がとても盛り上がった。さすが子どもたちのお手本になる保育士のたまごだと感心した。今まで遠いからあきらめていたけど、次もまたお願いしたい」、「保育士さんになるだけあって、子どもたちの扱いがとても上手でみんな喜んでた」、「どんな人にも笑顔で接してくれて、とても気持ちの良い学生さんたちがたくさんいることを知った」と、保育学生として講義や演習、実習で学んだことを一般的なボランティア活動の場で活かすことができ、地域住民や小学校の教員たちに非常に好評であった（写真2）。これらの実践から、ボランティア活動は「無償」、「見返りを求めない」等の条





写真2 萬歳ふれあい大運動会ボランティア活動（子ども、教員と記念撮影）

件に縛られがちであるが、実際には、確かに目に見える形での金銭的な授受や報酬がない無償の活動であったり、活動する者が意識的に見返りを求めない活動であったとしても、「心」の授受から来る「学び」や「成長」といった報酬を得ているといえ、教育機関が関与するボランティア活動は活動の事前準備や振り返りを綿密に行うことで、いわゆるサービスマーケティング<sup>注3)</sup>の要素を多分に持ち合わせる活動に発展させることが十分に可能であることがわかった。また、武田（2011）が指摘するように、アメリカの大学教育においては「まちづくり」という観点から、「大学周辺のコミュニティで組織立ってサービスマーケティングに取り組んでいる大学」が少なくなく、さらには「サービスマーケティングを専属で運営するサービスマーケティングコーディネーターを配置している大学」もある<sup>1)</sup>。今回は筆者が調整係として地域と学生の橋渡しを試みたが、今後は専門のサービスマーケティングコーディネーターを配置して実施することも、大学教育の充実への一助と成り得ると考える。

### 3-2 単発のボランティア活動から、継続的な地域インターンシップへ

大学のインターンシップや実地体験活動、あるいはサービスマーケティングは、通常は大学が企業などと連携をとって、学生が社会に出る前の職業経験や社会人として身につけておくべきことの実験の場となる。現在、全国の大学が取り入れているインターンシップ制度の中でも「地域イ

ンターンシップ」と称して、全国の学生が農村地域や中山間地域に行き、農業体験や祭事への参加、地域活性化活動などへの参加をし、経験を積みながら勉強をしている<sup>注4)</sup>。この地域インターンシップ制度は、地域からの期待が高まり、2013年度以降は増加の傾向にあると上野山ら（2017）は指摘する<sup>2)</sup>。さらには、共育型地域インターンシップとして、学生が地域の中に入っていく、学生が大学教育におけるインターンシップ制度もとで成長を遂げるだけでなく、学生と共同で事業に取り組む地域（住民）も一緒に成長していくことを眼目としている。共育型地域インターンシップに関しては、近年では西村ら（2017）の取り組みが代表的である<sup>3)</sup>。この学習形態を鑑みると、新見市の地域創生活動に取り組んでいる本学では、地域インターンシップの制度を作り、それを学生が活用した場合、他県の農村地域などに高い旅費や宿泊費を遣って行かなくても、大学所在地の新見市が中山間地域のため、市内において深く継続的に学ぶ機会を比較的容易に得やすいと考えられる。上野山の一連の取り組み（2016a、2016b、2016c、2017）からは、本学が有する看護学科、保育・教育の幼児教育学科、高齢者介護の地域福祉学科の学生が地域の中に入っていく、通常組まれている現場実習とは違った教育効果が期待できると同時に、地域が共に成長する可能性を多分に期待できよう<sup>4) 5) 6) 7)</sup>。この地域インターンシップ制度の創設によって大学の使命のひとつである地域貢献を学生が教員の調整・指導のもと一丸となって取り組むことができれば、新見市民によって支えられている公立大学・公立短期大

学である本学が恩返しする機会に恵まれると予想される。

また、今年度、ボランティアを通じて地域住民と繋がっていった学生たちの中には、「地域の方々と一緒にイベントを企画し、開催してみたい」という学生も出てきた。いわゆるプロジェクトベースドラーニング（PBL、Project-Based Learning、課題解決型学習）も視野に入れることも提案できよう<sup>注5)</sup>。以上の地域インターンシップ制度やプロジェクトベースドラーニングは、単発の活動ではなく中長期的な時間を要する。短大のカリキュラムでは単発のボランティア活動が限界であるが、4年制大学であれば実施可能である。また、中山間地域にある本学には、都市部出身者よりも地方出身の方が圧倒的に多い。つまり、出身地と本学所在地の新見市は比較的似た環境にある。保育の専門職養成校である本学幼児教育学科の学生たちは、中山間地域の新しい見市で専門知識や技術を学び、地域インターンシップにおいて「地域の中で、人の中で力を合わせて生きていくための術」を学ぶことができれば、地元に戻って就職してからも、知識や技術の活用ができるだけでなく、自分が生かされている地に感謝し、貢献できるほど醸成したシチズンシップを持った人材へと近づくことができるであろう。制度化されていない単発のボランティアのみでは、学生と地域住民が継続的に協働し、地域と大学にとって有益な活動とするためのノウハウを蓄積していくことは負担が大きくなりすぎるが、大学の正式な活動としてカリキュラムに組み込まれれば、様々な社会的な相において多くの利益を生み出すことに繋がると予測される。また、酒井ら（2015）のように、大学間連携、地域産業界との連携によってプロジェクトベースドラーニングを実施し、学生により多面的な学びの機会を提供し、同時に地域や地域の産業界に貢献する実践例もある<sup>8)</sup>。

本節までの検討から、現在本学科学生によって取り組まれている単発のボランティア活動を、今後、継続的な（共育型）地域インターンシップへ発展させることは、多くの利益を大学と地域にもたらすものと考えられるといえよう。

注1) 厚生労働省のホームページは、ボランティア活動について、「個人の自発的な意思に基づく自主的な活動であり、活動者個人の自己実現への欲求や社会参加意欲が充足されるだけでなく、社会においてはその活動の広がりによって、社会貢献、福祉活動等への関心が高まり、様々な構成員がともに支え合い、交流する地域社会づくりが進むなど、大きな意義を持っています」としている。（[http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/seikatsuhogo/volunteer/index.html](http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/volunteer/index.html), 2017年11月8日アクセス）

注2) 新見みらいづくり会議からは当日使用する自動車の車検証や保険証等の写しが提出されるなど、本学がこの

事業を安心して利用できるように配慮されていた。

注3) サービスラーニングとは、見返りを求めない伝統的なボランティアの概念に基づいてはいるが、例えば学習を見返りとしてサービス（ボランティア）を提供し、学生側とそれを受ける側とが対等の互酬関係に立つことによって、学生がボランティア活動の経験を授業内容に連結させて学習効果を高め、責任ある社会人になるために取り組むボランティア活動である（『ボランティア白書1999』編集委員会、1999.）<sup>9)</sup>。

注4) 地域インターンシップについては、例えば横山ら（2007）の島根県隠岐郡海士町での取り組み事例から報告されるようになってきた<sup>10)</sup>。海士町では、県立高校の島留学制度を取り入れるなど、早くから町の資源を教育に生かした取り組みを行ってきた。本学においても、第19回地方創生に「いみカレッジ『鳴滝塾』（2017年7月29日）で山内道雄海士町長の特別講演を実施した。

注5) プロジェクトベースドラーニングの大学教育内での実践事例や教育効果については、例えば、喜多（2006）や八島ら（2009）、奥本ら（2012）がある<sup>11) 12) 13)</sup>。

## 参考文献

- 1) 武田直樹：日本の大学教育におけるサービスラーニングコーディネーターの現状と課題、筑波学院大学紀要 6,119-131,2011.
- 2) 上野山裕士、永瀬節治：中大連携の効果とあり方に関する一考察 - 伏虎中学校の閉校にかかる中学生と和歌山大学生との協働的实践を事例に、観光学 (17), 35-46, 2017.
- 3) 西村君平、工藤祐介、小寺将太：共育型地域インターンシップのモデル構築 - 田舎館村における事例研究を通して -、弘前大学教養教育開発実践ジャーナル 1, 71-83, 2017.
- 4) 上野山裕士：認知症カフェにおける世代間交流 - 地域インターンシップ・プログラムでの実践を事例に、観光学 (14), 33-47, 2016a.
- 5) 上野山裕士：小学校の廃校舎を活用した地域の活性化 - 観光学部地域インターンシップの取り組み事例、地域経済 20, 9-14, 2016b.
- 6) 上野山裕士：地域における新たなつながりの創出に関する研究 - 広川町津木地区における大学生の活動事例を通じて、観光学 (15), 1-13, 2016c.
- 7) 上野山裕士：地域と学生との協働に対するサポートのあり方 - 紀美野町上神野地区における実践事例を通じて、観光学 (16), 61-70, 2017.
- 8) 酒井徹也、須藤智、坂井敬子、日比優子、永山ルツ子、野瀬元子：地域産業界と連携したプロジェクトベースドラーニング型演習の実践報告、静岡大学教育研究 11,113-

122,2015.

- 9) 『ボランティア白書1999』編集委員会：ボランティア白書（1999）－わたしたちがつくる新しい「公共」，日本青年奉仕協会，1999.
- 10) 横山玖洙，中塚雅也：地域インターンシップ制度の設計と運用に関する一考察－島根県隠岐郡海士町の商品開発研修生制度を事例として，農村計画学会誌 26, 281-286, 2007.
- 11) 喜多一：B-11 大学教育とプロジェクトマネジメント（研究開発トラック，持続的発展価値を実現する戦略開発プロジェクト・プログラムマネジメント），研究発表大会予稿集 2006（春季），103-108, 2006.
- 12) 八島雄士，森部昌広：実践的経営教育に関する一考察－プロジェクト・ベースド・ラーニングの効果について，九州共立大学経済学部紀要（117），71-82, 2009.
- 13) 奥本素子，岩瀬峰代：プロジェクトベースドラーニングにおける自発的行動分析，日本教育工学会論文誌 36（3），205-215, 2012.

